



賀露神社



1300 年の歴史を持つ賀露神社

賀露神社は、歴史情緒あふれる港町と美しい日本海が一望できる丘陵上に鎮座する、約 1300 年の起源を持つ神社です。大山祇命（おおやまづみのみこと）・猿田彦命（さるたひこのみこと）・木花咲耶姫命（このはなさくやのひめのみこと）・吉備真備命（きびのまきびのみこと）・武甕槌命（たけみかづちのみこと）の五神をお祀りしています。

大山祇命という農業神を祀るのは、もともと賀露一帯が砂浜であり、樹木や農作物があまり生育しなかったため、千代川下流域 5 カ村の総鎮守として祀ったのが始まりとされています。武甕槌命は鳥取藩の藩校「尚徳館」にも勧請された因幡随一の武勇・武道の神様であることから、県内外からスポーツ上達や必勝祈願に多くの参拝があります。また、奈良時代の学者で遣唐使として中国に渡った吉備真備公が日本に囲碁や文芸を伝えたという伝説から、学業成就や囲碁・技芸の上達を願ってお詣りに来られる方も多くおられます。

平安時代には国司の参詣を受け、江戸時代には藩主の信仰があつく、境内には藩主池田家や徳川將軍家の家紋が施された建造物をはじめ、鳥取藩から寄進された大太鼓があるほか、廻船商人や漁師たちが寄進した数多くの石造物が並んでいます。この中には全国的にも珍しい虎の狛犬もみられます。

2 年に一度行われる春の大祭（ホーエンヤ祭）は、鳥取県無形民俗文化財に指定されています。西日本の神社では賀露神社のみに伝わるといわれる珍しい「もみ火の神事」、吉備真備公を助けたという伝説に由来する「みこし海上行列」、因幡地方の郷土芸能であり日本遺産にも認定された「麒麟獅子舞」などが催されます。

出典

岡村吉彦（2012）賀露港（鳥取港）の「みなと文化」
賀露神社ホームページ <http://karojinjya.jp/>



賀露神社境内

ご本殿と拝殿

ご本殿は神様が宿るとされる神体を置く場所で、神社で最も大切な場所です。

拝殿はご本殿の前に位置しており、参拝者が本殿にある神様を拝んだり、祭祀（さいし）を行うために使われます。



130段の石段と随神門

境内へ続く 130 段の石段の正面にある随神門は、宝暦 12 年（1762）鳥取藩が建立した神社で一番古い建物です。

門の両側には、右大臣、左大臣の神像が弓矢を持って座り、ご祭神を守護しています。正面と裏正面には、徳川家のご紋である「三つ葉葵」が彫り込まれ、両横には池田家のご紋の「揚げ羽蝶」と「鴨嘴祇園守」紋が付いています。三つのご紋が付いている建物はたいへん珍しいです。

随神の回りの板は朱色で彩色され、天井には竜と虎が描かれていましたが、現在は、竜図だけが残っています。賀露神社が社の鬼板やみこしに「揚げ羽蝶」紋の取り付けが許可されたのは、宝暦 9 年（1759）10 月 3 日のことでした。



手水舎（てみずや）

手水舎は、神社で参拝者が身と心を清める場所のことです。

昔、神社の参拝前には川で清めをおこなう「禊（みそぎ）」という儀礼が風習化されていました。しかし、また、時代の変化により川で体を清めること自体が困難になったため、清める作法（手水）をおこなうことを目的とした建物を作り、手水舎と呼ぶようになりました。



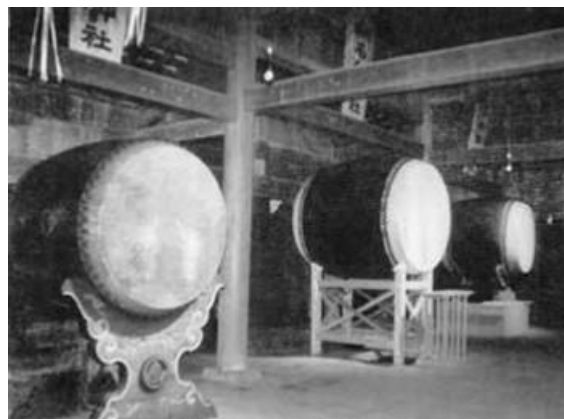
狛犬（こまいぬ）

全国でも珍しい虎の形をした狛犬で、凝灰岩でできています。大正 11 年（1878）に朝鮮半島南部の統営（トンヨン）に渡っていた信者からの寄進によるものです。寅年には多くの方が境内を訪れ、狛犬ならぬ狛虎？に触れています。



大太鼓

かつて鳥取城で時を告げる太鼓として使われていました。安政 5 年（1858）に八東郡妻鹿野（めがの）（現八頭郡八頭町）から切り出された 1 本の大ケヤキから大中小 3 つの太鼓が作られ、鳥取城に献上されました。賀露神社の太鼓は一番小さいものですが、口径 120 cm、胴回りは 450 cm あります。明治 6 年（1873）に払い下げを受け、名和神社・美保神社とともに奉納されました。



末社 船玉神社（御船宮）

船玉神社は、御船宮ともいいます。鋳物師橋と鹿野橋の間に大きな引き堀があって、御座船をはじめ多くの船の係留場でお祀りされていたものです。廃藩置県のおり、賀露村の船持中が願主となり、明治 7 年 8 月、賀露神社末社に奉祭されました。猿田彦（さるたひこ）命・事代主（ことしろぬし）命（恵比寿）をお祀りしていて、毎年 3 月に社殿前で例祭を行い、海上安全・漁業繁栄を祈願しています。



末社 水戸（みなと）神社

瀬織津彦（せおりつひこ）命・瀬織津姫（せおりつひめ）命の二柱をお祀りしています。河口・港の守護神です。

（参考）神社の境内には、ご本殿以外に小さな社を見かけることがあります。それらは「摂社（せっしゃ）」・「末社（まっしゃ）」と呼ばれています。

摂社は、本殿御祭神の荒魂（あらみたま）や后神（きさきがみ）・御子神（みこがみ）を祀った社のほか、御祭神と関係のある神や地主神（じぬしがみ）など、特別な由緒がある社で、これ以外の社を末社と呼びます。



北前船の大いかり

賀露神社の社殿の裏には、北前船の大いかりが二基おさめられています。

1基は、元々賀露港を中心に江戸時代の終わりと明治の中頃に活躍した船のもので、1疔以上の四本爪があり、長さが3疔以上もある大いかりで、赤茶色に錆びています。

もう1基は、昭和40年頃、鳥取砂丘沖の海士島付近の海底から引き上げられ、小型船一同で神社に納められたものです。これは、江戸時代に日本海で遭難した船の大いかりのようで、全体が貝殻でおおわれており、長さが2疔以上もあります。

その大いかりのそばには、第一開運丸（岸重成氏）が奉納した直径2疔の大きなスクリューも納められています。



御 船（北前船）

賀露神社には、江戸時代に日本海を大阪から北海道まで交易した北前船の五分之一に設計され、造られた船が2隻保存されています。

修理の折、船の中から天保4年（1833）と記された棟札が見つかり、今から170年以上も前に造られたものであることがわかりました。

棟札には、筆頭寄付者に船本氏（現船本家）、藤原棟梁のあとに、源作（源作屋の祖）、伝作その他寄付者が連名、世話人として広島屋（現一村家）、越前屋と記されています。当時出身地を屋号にした廻船問屋が多く、これらの人々が商売繁栄と航海の安全を祈って、神社に奉納したものと思われます。



絵馬掛所

絵馬（えま）は、神社に祈願するとき、あるいは祈願した願いが叶ってそのお礼をするときに奉納する、絵が描かれた木製の板です。

賀露神社の絵馬掛所には、多くの人々の祈りが込められた絵馬が奉納されています。

